

# 柏木義円『上毛教界月報』論文註解稿 (三)

市川浩史

## ◎本文、並びに註、解(承前)

○第十四号(明治三十二年十二月十五日)

発行人兼印刷人 大久保真次郎

宗教的道德か、非宗教的道德か

吾人は前号に於て今日是我国に於て最も重要にして亦最も急切なる問題は教を撰ぶより急なるはなきことを概論したり。次に決す可き問題は宗教的道德を取る可きか、非宗教的道德を取る可きかに在る可し。何をか宗教的道德と云ふ。第一 道の尊厳にして犯す可らざるの權威を認むるに在り。或は道の大原天より出ると云ひ、天之命之を性と謂ひ、性に率ふ之を道と謂ふと云つて漠然或る存在物に帰するにせよ、要するに其根本に尊嚴なるものありて、人に要求するに絶対的服従の義務を以てし此要求に対しては人は利害の念は勿論、生命をも献げざる可らずと云ふ程の權威を此に認るに在り。第二 靈性の永存と其無限の発達とを認むるに在り。山を掘れば金銀宝玉を出し、海を探れば真珠を得、人の心理には深く尊貴無比の靈を蔵し、其進歩限りなく永遠に開發し所謂義人は其神の国に於て日の如く輝くと云ふが如き榮光の地位に達するものなり。去らば、人の此世に在るは要するに、千變万化の事変に遭遇して此靈を鍛鍊琢磨し以て其光輝を研発するに在り。死生榮辱艱難辛苦凡て是れ此靈を研磨するの砥礪たらざるはなく一言一句我徳器を成すの機に非ざるはなし。我れ至誠を以て事を成さば外

に於けるの成敗は如何に成り行くも内に於けるの徳器は必ず其先を加へざるを得ずと信ずるに在り。第三 正善が宇宙を支配すると認むるに在り、之を一時代一我国に見れば一進一退一興一廃紛々常なきが如しと雖ども歴史家は世界の歴史を大觀して一目の下に之を統合し能く其間に千古を一貫したる目的の貫通し居り、へざるの手が冥々の間に世界の運命を指導しつゝあるを認む。之を短時期に見れば或は顔回にして天し盜路富で寿なるが如きことありと雖ども大定て人に克ち正義意に邪惡を征せずんばあらず。要するに世界運命の歸する所は完全に向て進歩するに在り。邪惡敗れて正義克つに在り。進化は宇宙運行の方針にして真理は最後の戦勝者なるを信じ泰然其分を尽し安じて天の經綸を翼賛するに在り。所謂天命の確實を信ずるに在り。

何をか非宗教的道德と云ふ、第一 道德は是れ世渡りの方便のみ。路なるものは畢竟幾千万の經驗を経て人の直覺となり了りたる利害捨の觀念に外ならざるなり。要するに非宗教的道德の見地に由れば道の世に在るは恰も会社が其社の便利の爲めに設けたる規約の類に過ぎざるなり。第二 修徳は敢て不朽の靈性の爲めに其光輝を磨出せんとするに非ず、只社会の信用と尊敬とを博せんが爲めなり。只事業を成就するの資格を得んが爲めなり。道義的感情を満足せしめて其快樂を享受せんと欲するは其高きもの、み。第三 人が南洲の所謂涉歴山路の難きよりも難き此人生を経過するに恃む所は只利害の打算に明かなる智術のみ。宇宙の運命は盲目にして正もなく邪もなく善もなく悪もなきなり。

吾人若し近世の人物に就て此兩派を代表す可きものを求めば、福澤論吉翁は非宗教的道徳家の好標本にして新島襄、吉田松陰氏等は宗教的道徳家の好タイプなる可し。然れども吾人は福澤翁の道徳と雖ども縦し意識的には宗教なきも其無意識の処には必ず宗教的の信念の之が根拠たるものなきを得ずと思惟するなり。見よ、翁が人生觀たる『人生來戲と知り乍ら此の一場の戲とせずして恰も真面目に勤むる』<sup>①</sup>てふ純然たる非宗教的の見地は如何に自家相矛盾し如何に道徳の根拠の薄弱なることよ。吾人は翁が道徳の實際の根拠は別に翁が意識せざる所に存し、翁が此見解は寧ろ翁が既有的の道徳に説明を試みたるものに過ぎずと為すなり。此の如き自家相矛盾せる薄弱なる人生觀が如何ぞ世の道徳を支持するを得んや。翁が福翁自伝の人生觀は能く非宗教的道徳の組織的見地を代表するに足ると信すれば他日更に評論する所ある可し。吾人は尚ほ前に掲げたる三項に就て非宗教的道徳の見地を評論し、以て此篇を収む可し。第一 凡て人には真心とか道念とか稱するものありて存し、人物の高貴なれば高貴なる程其良心の權威に愈々尊嚴を加へ儼乎として犯す可らざるものなることは否む可らざるの事実なり。去ればチャンニング氏<sup>②</sup>は道徳進歩の極は宗教となると良心の尊嚴其極度に達すれば遂に天之命、神の声となるに至るを意味したり。然るに非宗教的道徳の見地に由れば此良心の事実を解釈するに利害取捨の智慧が幾千年の經驗を経て直覺となりて遺伝したるものなりと為し、良心の起原を利害の觀念に歸し、道念を以て利害觀念の進化したるものに過ぎずと為すなり。果して嚴密に此見地よりする議論の歸結を求むれば進化したる利害觀念即ち良心若くは道念なるものは反て往々道と稱する空名の為めに性を捨て、義を取り利を去て仁に就き利害の取捨を誤るに非ずや。果して此見地よりすれば身を殺して仁を成すは迷信に非ずや。基督、ソクラテースの死は福澤翁の巧みにや世に処するに劣ること万々にして一生を無事に経過する滔々たる凡俗の人を賞賛せずして反て志士仁人を嘆美する万人の良心は究竟妄信なりと断ずるは非宗教的の見地の当然達す可き歸結に非ずや。第二 動植物より以て

人の肉体に至る迄必ず皆其發達す可き処迄發達し其れ自身の完全に達せざるはなし。独り完全を望んで全完に達せずして終るものは其れ唯人の心靈か、人は愈々進めば愈々進む程其理想高く其現実境は愈々其理想境と相距る遠きを認むるものなり。去れば孔子は義を聞いて移る能はず、不善改むる能はず、学の講せざる徳の終らざる、是れ我憂なりと嘆じ、ソクラテースは予れ他に人に優れたるものなし。唯己れの不

良を知ること人よりも多し。これ予が人に優れたる所以かと云ひ、ハミルトン<sup>③</sup>は學問は知らざるに始て知らざるに終る。其既に知て足れりと為すときは是れ學問頓止の時なりと云ひミルは人は學識愈々進で愈々無學なり。そは無學の境界を知る愈々大なればなりと云ふ。智識に於ても徳性に於ても人の心靈は、無限の理想を望で自ら奮ふものなり。人の大なる所以は実に此にあらざるか。然れども心靈果して肉体と共に朽腐するものとせば誰れか其理想に達し得るものあらんや。寧ろ小人は禽獸の如く理想なくして此世を終るが当然にして聖賢哲人がなまじひ大理想を懷て自ら奮ふは到底達すること能はざる空望を抱て自ら歎くものに非ずや。人の理想は是れ精神の花なり、人の精神若し不朽に非ずして空しく理想を抱て朽腐するとせば是れ空花にして果実を結ばざるものに非ずや。万物の中、人を最も大と為すとの西哲の言は畢竟無意義の言に過ぎざるなり。第三 宇宙は単に盲目なる物質的勢力の盲動する所にして人は只其間に在て巧みに利害を打算して五十の人生を事なく過ぐるに過ぎずとせば、彼の自ら反して縮からば千万人と雖ども吾れ往かんとは果して何の意味あるか。彼の孔子が匡人の囿中に在て天の未だ斯文を喪さざるや、匡人其れ我れを奈何と泰然たりしは果して何の意味あるか。

哲学大家カント<sup>④</sup>は道徳の根拠は神、未來（靈性の不朽）意志の自由に在りと為したりと道の權威靈性の不滅天命の確實誠に此三者は真成道徳の根拠にして苟も道徳の在る所には此等の觀念が、或は臆氣にか、或は無意識にか必ず働きつゝあるや疑ふ可らず。英国の詩伯テニソン<sup>⑤</sup>は宗教的の信念は野の裸火の如く滅えんとしては燃え、燃えんとしては

滅え明滅定かならずと雖ども而かも必ず万人の心裡に潜蔵せざるなく、神学なるものは此裸火を取りて之を灯台上に上げせ其光を明かならしめたるものなりと為せり。実に未だ灯台上に上げして宗教的表式を現はさしめざる裸火、其儘なる信念は人宗教的的信念たることを自覚せずと雖ども何の時代の邦国に在ても光の如く世を照らす道德的行為は実に此信念の発現に外ならざるなり。我国に於ては不幸にして宗教的表式を現はしたる仏教社会に此の信念の発現を欠き、反て宗教的表式の存せざる土人の社会に此信念往々発動せしを以て人往々宗教と道德と相関せざるもの、如く見做すに至たりと雖ども我国維新以前の社会に於て道義を鼓舞せしものは正しく此信念にして吉田松陰の如き特に其顕著なるものなり。吾人の見解に由れば、純然たる利害打算のみに由りて発動する行為は決して道德的行為と見るに足らず、仮令自らは自覚せざるも真成なる道德の存する所には必ず此信念の発動するを認むるなり。故に吾人は純然たる非宗教的道德真成の道德に非らず、否な純然たる非宗教的道德なるものは存在することなしと敢て断言して憚らざるものなり。近來道義的退廢の傾向あるものは正しく宗教を輕視し、尊貴なる此信念を滅定かならざる覚束なき有様に之を置くを以てなり。天之命之を性と謂ふ、宗教は陋乎として抜く可らざる人の天性なり、取る可きは宗教的道德なる哉を去らば如何なる宗教を採択す可きか、是れ吾人が次に考究す可き問題なるなり。

## 註

- (1) 「道之大原出於天」（漢書、董仲舒）  
 (2) (1) の「道之……」が、朱熹の『中庸』の注釈である『中庸章句』に引用されている。柏木はおそらく『中庸章句』に拠つたものと思われる。  
 (3) 西郷南洲（隆盛）の「山行」と題する漢詩、「駭犬衝雲独自攀 豪然長嘯断峰間 請看世上人心險 涉歴艱於山路艱」の一節。  
 『西郷南洲遺訓』岩波文庫、一九三九、による。

- (4) 福澤諭吉『福翁自伝』  
 (5) William Ellery Channing (一七八〇～一八四二) はアメリカの会衆派教会の牧師。  
 (6) 「子曰、徳之不脩、学之不講、聞義不能徒、不善不能改、是吾憂也」（論語、述而）による。  
 (7) Alexander Hamilton (一七五五～一八〇四) は建国期アメリカの哲学者、政治家。  
 (8) John Stuart Mill (一八〇六～一八七三) は英国の哲学者。  
 (9) 「天之未喪斯文也、匡人其如予何」（論語、子罕）による。  
 (10) Immanuel Kant (一七二四～一八〇四) はドイツの哲学者。  
 (11) Alfred Tennyson (一八〇九～一八九二) は英国の詩人。

## 解

文中に中国の古典のひとつ、中庸の冒頭の「天命之謂性」という一節に何回も言及されていることに表われるように、儒教思想からの援用が顕著な論である。なかでも柏木は陽明学に造詣が深かったので、ここの行論は陽明学の思惟、概念をその論理的な基礎としている傾向を指摘できる。

○第十五号（明治三十三年一月十五日）

発行人兼印刷人 大久保真次郎

自由教育自治教会

故新島襄先生葬送の列中一ト際目立つて見へし一大旗あり。墨痕淋漓「自由教育自治教会両者併行国家万全」十六字を大書す。是れ「彼等は世に取らんとす、我儕は世に与へんとす」てふ先生平生の精神を表したる他の姉妹旗と共に先生の知己故勝海舟伯の揮毫に成れしものにてありけり。先生常に語り玉ふらく日本を改革するに二個のダイナマイト（爆裂弾）あり。曰く学校と彼の清教徒が孤舟大西洋の怒濤を破り始めて天涯万里の新英国の寒天地に自由の郷を求むるや己れの住宅

に告て先づ学校と会堂とを創造したり。而して米国今日の文化は実に儼然として此二大柱礎の上に聳え、爾来自由平等博愛平和を以て其国是と為し此人情の大義を全世界に播伝するを以て窃に其国家の神聖なる天職と信ぜり。先生新英国に在て清教徒の正気を呼吸し深く米国文化の真髓を看破せられしもの帰朝、政界□榮の地位を辞して敢て逆境に立たれしは猛然此二大ダイナマイトを取て我国家の中央に爆裂せしめ大に我日本社会を根柢より革命せんと期せられしなり。自由教育自治教会ア、是れ先生の主義發表する二大標語に非ずや。社会経綸に於ける先生の二大綱領に非ずや。噫爾今日の教会に果して敵軍の堅城を破壊するダイナマイトの爆裂はあるか。噫爾今日の同志社に果して日本社会を爆裂して根本的の革命を捲き起すダイナマイトの張力あるか。聞く、往年英艦の鹿兒島に入口するや衣至衽袖至腕的の当年薩南の健児は決然ダイナマイトを懐にして敵艦に入り其身諸共爆裂して敵艦を粉碎せんと工んたりと実にダイナマイトを懐き居るものは恐る可きものなり。噫吾人の教会否吾人各自に果してダイナマイトを懐き居るや、如何。今や我邦社会の腐敗甚しく改革の爆裂力弛廢して唯旧□の儘に腐敗し去らんとするの有様なり。大隈伯は嘗て此形勢に困じ当分政界の紛擾を避けて専ら育英の業に執掌せん人物雲の如く□□国家の事何かあらんと語られたりと。然り、新島先生は二十年前既に此に着眼し滔々たる所謂人物競ふて政界頭赫の地を逐ふの時、耶蘇と侮られ国賊と罵られつゝ、或は相国寺畔の陋舎に僅かの青年と学を講じ、或は田舎の茅屋に諄々として福音を説き以て社会の地盤より改革せんことを期せられたり。然るに社会は尚ほ此根本的の事業を等閑に附し、先生をして単騎奮闘空しく大志を齎して逝かしめ、先生在世中股肱となり腹心となりて働らきたる人々すら其事業を抛て榮利の地に走り社会の腐敗益々甚しからんとするの今日大隈伯の此言を聞く。深く先生の志を懐ふて転た感慨に堪へざるなり。二十年前先生の如く政界頭赫の地位を棄て、専ら育英の業に執掌せん人物雲の如く起り□然らば我邦の現状は如何に見栄へありし事ならん。今日と雖も未だ遅からず。然れ

ども果して其人あるや如何。然れども吾人は更に言ハんと欲す、有為の人物専ら伝道に執掌するもの群り起るに至らざるば真成の革新は決して成らざるなりと。ア、伝道士出でよ、伝道士出でよ。伝道の大志を抱て決然学に奮ふ有為の青年出でよ。吾人学浅く信薄く幾回か自から省みて吾れの無能為す事なき此の如し。天意ならば喜で聖職を去らん。若し聖職を去るも誓て今日よりも善き生活を為さるゝを願ふ。希くば御旨を示し玉へと祈れり。今日能力あるの人物寧ろ頭赫の地を逐ふて伝道界人なきの期節止むを得ず吾人をして此職に居らしめ玉は、主よ希くば吾人に聖靈のダイナマイトを与へ玉へ。自由教育自治教会是れ先生畢生の二大事業なり。否な後世も継紹して大成す可き不朽の事業なるなり。特に我国に於ては国家も家庭も学校も皆教会に由てバプテスマを受けしめざる可らず。教会の勢力を扶植して日本国家の一大地盤を為すは是れ先生の宿志にして亦我邦今日の急務なるなり。今日先生を記念するの吾人は誠実に先生の志を継紹するの決心覚悟なかる可らざるなり。

#### 註

- (1) 「衣、衽に至り、袖、腕に至る」は頼山陽の「前兵児謡」の一節。身体が成長し、衣服が小さくなっていることをいう。詩吟で好まれた詩句。
- (2) いそしむこと。
- (3) 京都御所北の相国寺のものとの境内地に造られた同志社の初期の校舎のことをさしている。

#### 解

本論は、新島襄歿後十年を記念し、この年一月二三日に安中教会において「故新島襄先生十周年記念会」を開催するにあつたの記念号の論である。なお、この記念会では説教をグリーンン宣教師、記念演説を横井時雄が担当した。新島襄を記念するための論たるべく、新島襄

渡米・滯米後、帰国後の事蹟を「自由教育、自治教会」を標榜した一貫した生涯として紹介する内容となっている。興味深いことは、柏木の言い方が徹底して社会改革を中核としていたことである。もちろんこれは、個人の真の信仰が集つて真の社会、国家をつくることになる、という発想に基づいたものであった。その点において、個人と社会、国家とをいかにして柏木が関係づけようとしていたかを彷彿とさせる論である。

### ○第十六号（明治三十三年二月十九日）

発行人兼印刷人 大久保真次郎

吾人の眼に映じたる新島襄先生

柏木義円

近頃往々先生に豪傑の風ありしと賛し、慷慨なる日本武士の氣象ありしと称へらるゝを耳にする事なるが、日本武士にして日本武士の氣象あるは当然の事にして豪傑は由来東洋に乏しからず。吾人が先生を敬慕する所以は古来東洋に見出し得ざりしものを先生に見出し得たるが爲にして吾人の眼に映じたる先生は実に東洋に破天荒と思しき所ありたるを以てなり。先づ第一は真誠なる自由を愛せられし人物なりしなり。自由の住む所是れ我郷と歌うものは西洋に珍しからずして実に東洋に於ては破天荒なるなり。敢て冒険功名を賭せんとするにも非らず、又奇利を博せんとするにも非ず。自由中の最も尊貴なる良心の自由、即ち我良心の啓示する所に従つて自由に神に敬事せんと欲する宗教の自由を得んが爲に孤舟大西洋の怒濤を横ぎり氷雪骨を刺す天涯万里の寒天地に自由の心を求めたる清教徒の裔孫なる新英蘭<sup>1</sup>に在て深く其宗教的感化に薫染せられたる先生は実に満身自由を愛するの人たりしなり。所謂東洋流の豪傑は其志大なる事を為さんと欲するに在り。其意義の大なるよりも寧ろ人々の耳目に大なる事を為さんと欲するに在り。彼のハンブデン<sup>2</sup>が僅々数銭の課税の爲に人權に關し自由に關して捨て置く可らずと爲し奮然蹶起剣を抜て革命を捲き起したるが如き

は東洋豪傑の小事の爲に國家の紛擾を醸すとして排斥し去る所なり。不羈自由とは磊落不羈と稱して権貴富豪に入子<sup>3</sup>ル快氣的我儘に非るなり。自ら重ずると雖とも敢て傲岸他を軽ずるに非ず深く人格の尊貴を認めて人權の尊重す可きを銘じ自らを重じ亦他を重じ亦何を重じ何物を以ても人權に代ふ可らずと爲すに在り。先生十六歳にして始めて漢版の米國地圖を閲し其自由制度を欽羨して慷慨自ら禁ずる能はず。幕吏は何故に我等人民を視る犬豕の如くなるやと叫ばれしは是れ先生自由思想の発芽なるか。明治五年岩倉大久保木戸伊藤田中等諸公<sup>4</sup>特命大使の一行米國に在るや先生を召して通訳を囑托せんとす。先生毅然として之に返書して曰く、予は是れ國禁を犯して法、當に死に當る可き。化外不羈の逸民今や上帝の外、我に主なし。若し一個の友人として召されなば敢て貴命に應ぜんと往て謁するに及び地座伏拝の礼を取るを屑よしとせずして西洋立礼の態度を取られしが如き亦以て其自由不羈の精神を見る可きか。其の晩年一致組合兩教会合併問題起るや、一致教会の組織は大会中会を支配し、中会小会を支配するに在て組合教会の主義は個人を単位として教会を組織し其の總會なるものは単に各教会が協同して組合内共同の事業を挙ぐるに在て各教会を支配するものに非るなり。而して兩教会合併の条件は教会政治は一致教会の組織に近づくに在て之を以て兩教会のみならず日本在る新教諸宗派を合同し統制を強固にして運動を敏活にし大に日本の伝道を挙げんとするに在りたり。先生之を聞て清教徒以來相伝し來りたる自由自治の主義日本教会に湮滅せんかと痛く之を憂へられ、当時組合教会の有力者横井海老名小崎宮川市原氏等同志社内にては現同志社校長として先生の股肱たりし金森氏を始め、教授森田氏等合併論に左袒せられ、西洋人にてはデビス氏始其他の諸氏亦皆之に應ぜられ只悍然反対して非合併論の爲に氣焰を揚げしは独りシドニー、ギユリーキ氏ありしのみなるに至り、先生の憂慮一方ならず。当時病氣にて医師より他人に面会する事を嚴禁し居らるゝにも係らず黙して語らずんば胸遂に破裂せんとて同情の徒に其衷情を洩らし、若し合併にして成らば北海道に退隱し

て農夫とならんと迄語られ、遂に同志社がアメリカン、ポールドと分離せざるを得ざるの結果を見るに至るも断乎として之には反対せんと決心するに至られたり。同志社は先生の生命とも云ふ可き唯一の事業なり。之が盛衰を賭しても其自由自治の主義を貫かんとするの精神、吾人は先生に取ては自由の価値が如何程大なりしが、吾人に之を量るの能力なきを感じずんば非るなり。先生の同志社に関する遺言の第二項に同志社教育の目的は其神学政治文学科学等に従事するに係らず、皆精神活力ありて之を邦家の尽くし真正の自由を愛するの人物を育成する事を勉む可き事とあり。又嘗て人に語て、教育の目的は独立不羈にして精神あり、活気あり、自由を愛し、真理を愛し、邦家の為に一身を献げて働く所の人士を養成するに在り。個儼不羈の学生は之を拘束せず、其本性に従て順導し、其人物を為さざる可らずと曰はれたり。浮田和民氏が先生には自由は一種の情欲なりしと謂はれしも知言と謂ふ可し。然れ共同社社の初年には自由民権の論天下に雷轟し、波濤の如く一世を捲くの有様なりしと雖ども先生は真正の自由に由らざる可らずとて冷然之に応じ玉はざりしが嗚呼当年の自由民権論は今如何。板垣死す共自由は死せずと絶叫したる板垣伯は今如何。大坂日報に自由を主張せし古澤滋君近時評論に民権を唱へし小松原英太郎君、将又仏蘭西歸へりの民権家西園寺侯、中江篤助翁は今如何。更に又名詮自称の自由党は今如何。先生の病革るや同志社教育の方針に関する遺言を筆せしめ、読で真正の自由を愛するの一句を逸するを知るや。乍ち之を添加せしめ玉へりと先生常に曰く、真正の自由を愛するもの鮮し。否な我党の土に於てすら全く此真味を解し得たるもの多からず。豈歎せざる可んやと。嗚呼我党の人士に於てすらの一言実に我党の玩味す可き所に非ずや。先生、徳富氏に寄せられたる書状の中に曰く、自由は余が活ける標語なりと。

第二 利害の人に非ずして主義の人なりしなり。東洋には意志の人あり、主我の人ありて主義の人なし。主義の人と主我の人とは似たるは則ち似たると雖ども其根柢に於て異なる所あるなり。其主持する所、

神の旨を奉じ真理を貴む謙遜の精神より来るものに非れば真正なる主義の人に非ずなり。先生が大使の一行に従て欧米を巡遊せらるゝや大陸にては日曜日にも汽車開通し居る事なれば大使の一行はズンと進行せらるゝと雖ども先生は堅く聖日を守り留りて日曜日を過ごし月曜日には一行を追ふて前進せられしが如き同志社大学資金募集の際、井上伯の如き人々が主人となり、饗筵を設けて紳士を招請し、先生をして其志を訴ふるの便を得せしめらるゝ際にも禁酒主義を守りて酒を用ひしめざりしが如き合併問題の時に其畢生の事業を抛ても其自由自治の主義を貫かんとせられし如き、以て先生の主義の人なりしを見得す可し。先生の詠に曰く「主義と立ち主義と仆れん我身なり浪華の夢の世にしあらねば」先生が反対家にも味方にも堅き信用を得られしは実に此に在り。先生が木戸孝允、田中不二麿氏等より深き信用を得られ異日同志社が京都府より種々の妨害を蒙むるに当り、中央政府より少なからざる援助を得られたるは彼の欧米同行中其主義を守るに堅実なりしを知られたるに職としてこれ由ると云ふ。要するに東洋の人は意気の人なるも主義の人に非るなり。彼の大西郷が甘じて賊名を受け己れを知りし若殿原に其生命を与へて城山の露と消えしが如き其意気には深く感服すると雖ども彼は主義の人なりと謂ふ可らざるなり。彼の初め地租増税論者であり乍ら今は非地租論なる平岡浩太郎氏を井上伯が責めて「如何に政略とは言へ貴公が増租に反対とは驚くぢやないか」と言つたら氏は「私は自分の属する党派の為には意見や主義は勿論此の白髪首でも犠牲に致す男で御座いますから、地租論を抛つ位は何でも御坐いません」と気焰を吐きたりと東洋豪傑の意気とは実に此の辺にて神変山没端倪す可らずなど云ふ所が反て其得意とする所なり。先生嘗て故中嶋信行氏に大坂に会する時に先生徐ろに説きて曰く、我国現今の政治家にして真に己れの執れる主義に立ち確乎として変せず断乎として動かざる者は実に寥寥星も畜ならざるのみか殆ど一人も無しと云ふも過言に非ず。然るに反て社会の下層に潜伏する一匹夫にして其主義に立て断乎動かざる所あるは吾人の往々認むる所な

り。嗚呼主義に立つ能はず、渺たる一匹夫にして反て確乎動かざる所あるは之れ果して何に依るか。他なし。前者は真理の光を認むる能はざるも後者は真理の城に拠れるが故のみ。蓋は主義なるものは真理に拠て始めて確乎動かす可らざるに至ればなり。君若し心あらば幸に真理を探り真神を求められては如何と。中嶋氏答へて曰く、御好意謝するに余りあり。左れど余は今や少しく禅学を修めつゝ、あれば遺憾乍ら貴論に従ふ能はずと。然れ共氏は遂に基督信者となられたり。然り。真正なる主義の人とは真理の城に拠りし者の謂なり。

第三 政治上皮相の改革に由らずして人心上根本的改革に志されし事。東洋人は兎角政治に由らざれば大なる事は為し難しと思ふもの、如く、苟も志士とでも云ふ可き者は皆国家に由て事を成さんと欲するものなり。今日に至るも尚ほ全然其の氣風改らざるなり。然るに此際政府の力に由らずして国家の為に尽くさんとしたる者は只僅に我新島先生と福澤論吉氏とありしのみ。然れ共福澤氏と雖ども戸毎に説き人毎に論すと云ふが如きは迂遠の事なりと自ら言はるゝ程にて尚ほ制度組織に頼て一とからげに器械的に社会を改造せんと計らるゝものに似たり。独り先生に至ては戸毎に説き人毎に論すてふ所謂迂遠の事を以て個人々々の心靈を改変し之を聖め之を高むるに非れば到底真正なる文明社会を致す事能はずと為し、極力教育と宣教とに尽瘁せられたり。「人或は云ふ、政治の善なるに由て宗教起ると。余の見る所に由れば政治の改良せられ文化の進歩するもの一として宗教の力に由らざるばならず。米国が其勢力の赫々として其文運の隆々たるは政治に非ず。教育に非ず。唯宗教の力即ち基督教に由りて養成せられたる良心の堅固なるが為なり。田舎の百姓や牛乳売の婦女の如き学識なきものと雖ども真心堅固にして善に勇み義に進む事、誠に感賞に堪へたり。之を我国一般の風俗に比し來る時は余は大に愧ぢざるを得ず」とて田舎の茅屋に入て匹夫匹婦に諄々道を伝へ、某貴顕の君の有為の資を抱き春秋に富めるの身を以て何を苦でか京都の地に隠退し厩廐に伏し徒らに青年婦女を相手として閑日月を送るかとの切なる任官の勧めに

「余にして今廟堂に立つも果して日本国の為に能く幾何の効をが奏し得可き。若かず幾多の青年を薰陶し他日千百の新嶋を輩出して國家の為に尽くさしめんには是れ余が畢生の目的なり」と答へて同志社教育の経営に余念なかりしが如き世の所謂志士は其志、事業に在るも先生は活ける人間を重じ個人々々の靈光を發揮して以て社会を根本より改造せんと欲するに在りたり。是れ先生が滔々たる時流に異なりし所なり。

先生臨終の際の態度に就ては東洋の豪傑風にしてクリスチアンらしくならずと難するものあれば豪傑の風ありて普通のクリスチアンの如くならずとて稱賛するものあり。豪傑風なりしかクリスチアン風なりしか余は親しく其場に在り合せざれば之を知らず。能し之を知るとするも余は先師臨終の際の態度に就て之を批評する事を得ざるなり。余は只先生が再度の洋行中瑞西の山中にて病頓に危篤を加へ既に死を期せられし時、自ら認められし遺言書と当時の日記の一節を抜書せん。以て先生臨終の際の心事を推す可し（前略）日本に於ける余の計画は破れやせん。然れ共主は既に今日に至る迄恩恵を加へ玉ふたる事大なり。余は之に感謝せざるを得ざるなり。余は又た固く主が尚ほ大に日本のために妙へなる経営を為し玉ふを信じて疑はず。主よ願くば我愛する日本國の為に多くの真正なる基督信徒と高貴なる愛國者を起せよ。アーメン」（同地附近の某牧師への遺言の一節）「余が日本に対する計画は一にして足らず。然れ共主の日本を保護し玉ふは余に勝ざる事万々なるを知れり。余は俯伏して我國の将来を此正確なる掌裡に委ぬ。余は全く天意に一任せしを感ぜしと雖とも尚ほ暗涙の両眼より滴り落つるを禁ずる能はざりき。其より我遺友の為め又我靈魂の為に祈禱し、一ヒのブランドーを飲で寒戦を防ぎ芥膏を胸に塗て痛苦を拒がんとせり」是れ一人の知人もなき天涯万里の旅舎に在て孤影悄然死期近しと感じ、二通の遺言書を認められし当時の日記中の一節なり。先生亦個人的伝道に熱心なりき。米國着後函館脱走の際専ら斡旋せし一友に書を寄せて詳かに其近状を報じ、如何なる苦難の際にも神に訴

るや常に我悲しきは喜びに変じ我苦難は成効と化したりと云ひ、諄々其実験を叙して真神を信ぜん事を勧めし末「ア、聖書を学び真神を信ずるは我法禁ずる所なり。然れ共此の如き法律は破て可なり。吾人は神に従ふ可きか將た人の法律に従ふ可きか、神は確かに吾人を保護し玉ふなり。ヨシ之が為に一命を絶たる、事あるとも君の靈は無窮の生命を得て更に光榮ある国に在るを得可し。余は実に君と共に彼処に在らん事を望む」と断言せられし如き何等の確信何等の英氣ぞ平生沈重なる先生も其道を説くに当ては生正氣満面精神烈火のごとく凛乎当る可らざるものあり。嘗て故勝伯に道を勧む。伯甚しく其真面目に感じて曰く「新嶋はヒドイ男だ」と又嘗て井上伯に一夫一婦を説く。伯辟易して曰く「余は白刃前に閃くも怖れざりしも新島の一言には心胆寒かりし」と。

尚ほ同志社の教育家としての先生に関しては記す可き事多しと雖ども文字意外に長くなりたれば先づ筆を此に擱かん。他日機を得ば更に新島先生社」と題して記述する所あらん。

## 註

- (1) ニューイングランドのこと。
- (2) John Hampden(一五九四〜一六四三)は、イギリスの政治家。艦隊を新設するためにイングランド王チャールズ一世が増税を企てたことに反対した。
- (3) 公卿出身の岩倉具視、薩摩出身の大久保利通、長州出身の木戸孝允、伊藤博文、尾張出身の田中不二麻呂。
- (4) それぞれ横井時雄、海老名弾正、小崎弘道、宮川経輝、市原盛宏のこと。
- (5) 金森通倫のこと。
- (6) 森田久万人のこと。
- (7) Sidney Lewis Gulick(一八六〇〜一九四五)は、アメリカ人牧師、宣教師。日本人移民を排斥する排日移民法の改正に取り組ん

だ。

- (8) American Board はアメリカにおけるプロテスタントキリスト教海外伝道組織で、はじめは超教派であったが、のちには会衆派の組織となった。新島襄はこの組織の一員として会衆派のキリスト教を伝えた。
- (9) 板垣退助のこと。
- (10) 古沢滋(一八四七〜一九一一)は、官僚、政治家、ジャーナリスト。
- (11) 小松原英太郎(一八五二〜一九一九)は、官僚、政治家。
- (12) 西園寺公望のこと。
- (13) 中江兆民。篤助とも称したようだが、正しくは篤介。
- (14) 徳富蘇峰(猪一郎)のこと。
- (15) 西郷隆盛のこと。
- (16) 平岡浩太郎(一八五一〜一九〇六)は、福岡の政治結社、玄洋社の創始者。
- (17) スイスのこと。

## 解

この論は、題目に示すとおり、柏木から見た新島襄についての小評伝である。論点はこの年一月一日に新島襄の逝去十周年記念会が開かれたことにちなんで執筆されたものと思われる。論点は、新島が「真誠なる自由を愛せられし人物」であったこと、および「利害の人に非ずして主義の人」であったことの二点である。前者には、いわゆる組合、一致両教会の合同問題が惹起した際の言動についても言及されている。

一八八三(明治一六)年、全国基督信徒大親睦会から合同の機運が生まれ、それが協議が現実的になったのは一八八六年頃であった。合同に向けて両者はそれぞれ總會などを開いて現実化していったのであるが、組合教会側では修正に修正を重ねた結果、最終的に合同は中止



となつた。この原因について、一致側の長老主義と組合側の会衆主義との乖離とされているが、実は組合側、とりわけ新島襄が大上段に会衆主義を振りかざしたことにありという見解もある（海老沢有道、大内三郎『日本キリスト教史』日本基督教団出版局、一九七〇）。

後者では、新島が利害損得に囚われず、信仰に生きるという主義を重んじたことで、却つて新島とは思想を共にし得ない人物からも篤い信用を得たということなどが述べられている。また最後には、新島の臨終の様子や遺言書について述べられている。柏木は晩年になつて新島の伝記執筆のための準備をしていたが、この論から新島に関する資料をこの時点から蒐集していたことが窺われる。なお本号の「紀年欄」には新島未亡人八重から本紙発行兼印刷人である大久保真次郎に宛てた手紙も転載されている。

#### ○第十七号（明治三十三年三月十五日）

発行人兼印刷人 大久保真次郎

本号「社説」では柏木自身の文章ではなく世良田亮なる人物の「暗黒を経て光明に入る」と題した文章を掲載している。これについて柏木はつぎのように解説している。このなかで柏木は、世良田亮（一八五六～一九〇〇）の論を転載したあと、自分自身によるこの論の続編を執筆する由を記しているが、それは果たされていない。

吾人は既に宗教的道德の取る可きを論じ、將に宗教撰撰論に入るの順序となれり。適ま福音新報に世良田亮氏の演説梗概出づ。先づ求道者の為に之を本欄に転載し、次で吾人のの続稿を掲ぐ可し。氏は信州上田の藩士にして今は本邦第一の巨艦富士艦の艦長海軍大佐たり。嘗て天龍艦長として威海衛攻撃艦隊中に在りてゴールの神子降生論を繕き金剛艦長として遠洋航海中フレデリック、モース氏の説教集を味はれしと云へば其好學篤信の士なるや知る可きなり

#### ○第十八号（明治三十三年四月十五日）

発行人兼印刷人 大久保真次郎

本号「社説」でも柏木自身の論は掲載されず、片岡健吉（一八四四～一九〇三）の「武士道と基督教（実験上の宗教より）」と題した論文を転載している。これは川崎巳之太郎が一八九七（明治三〇）年に編集した講演録『実験上の宗教』に掲載されたもので、原題は「封建武士と基督信者」である。なおこの論の冒頭で片岡はつぎのように自己紹介している。

予は封建武士の遺物にして兼ねて又基督教の信者なり。武士道及び基督教の感化は両ながら多年之を味ひて身を立て世に処しつゝ、あり。而して常に感ずるは両者類似の点の多き事なり……として論を進めている。

#### ○第十九号（明治三十三年五月十五日）

発行人兼印刷人 大久保真次郎

致富と人生  
如何にして富を作り、如何にして之を世々に伝へんかとは殆んど千万人の齊しく焦慮する所なり。而して如何に富を使用せんかと熟慮するものに至ては反て千万人中僅に有るに過ぎざるこそ奇体なれ。是れ世の富豪が往々内自らの清福を全ふすること能はずして反て悲惨なる運命を招き外社会の公益を為す能はずして反て茶毒を世間に流す所以なるか。見よヴァンダービルド<sup>1</sup>を。彼は鉄道王と称せられ其富八億に上り米國第一を以て目せらるゝに非ずや。彼は盜賊或は刺客の害を慮りて平生武装せる壯士を備ふて其身を護衛せしめ居ると。一日客あり。謂つて曰く巨万の富を有せらるゝ、御身の生涯は如何ばかり楽しかる可きぞ、と。彼首を重もげに打振りて予を幸福と仰せらるゝか。サテモく予は長き自分の生涯に於て未だ一時間の幸福をも得る能はず。思ひ見られよ。予は飲食すること他人より多からず、衣服を纏ふこと他人より多からず、眠るに一の寝台を要するのみ。其他は一切余分な

り。予をして日夜配慮苦計息むなからしむものは予が巨万の富なりと語りたりと。見よ、ロスチャイルド<sup>2</sup>を。彼は英国第一の富豪なるのみならず彼れの承諾を得ずんば欧州の諸政府は戦を開く能はずと云はる、程其富の勢力偉大なるに非ずや。彼れの家には世界の各地より日々多くの寄附依頼状来ると共に又脅迫的書信の舞い込むこと挙げて算ふ可らずと。ゼイ、グールド<sup>3</sup>に至ては米国三富豪の一に列すると雖ども多くの人より憎まれ屢々殺害の脅迫を受け、神經過労の爲め終に天寿を全ふせずして世を逝りたり。世人が幸福唯一の宝庫と羨慕する富豪家の運命往々此の如きもの多し。独り其間に在て心を如何に富を使用せんかとの問題に潜め、之が爲めに富の福音、富の利用、博愛の最良田野等の著作を爲し、今や着々其主義を實行しつゝある米国の製鉄王安ドリウ、カー子ギー氏<sup>4</sup>こそ実に富豪家の龜鑑と云ふ可けれ。氏は一千八百三十七年（我天保八年）蘇格蘭<sup>5</sup>に生れ、家極貧にして甫めて十歳父母と共に北米合衆国に流れ移り、雇はれて気罐釜の火焚小僧となり程なく転じて電信配達夫となり、其間に電信技術を見習ふて電信技師となりしが、当時年僅に十三歳。其翌年、父病て歿し、母と幼弟との養育は氏の双肩に懸りたり。当時一家の貧苦甚しかりしが時運年と共に開け、苟しくも株式等投機的商業を爲さず、着実正經の業に由りて次第に富を蓄積し遂にカー子ギー製鉄会社々長として全世界の製鉄王と称せられ無慮四億の巨財を積で米国第一流の富豪となるに至りたり。四億の富と云へば其れより生ずる一年の収入少なくとも二千万円、一日の収入五万余円、斯る莫大の巨富を如何にして六十年の短生涯に蓄積し得たるかと云ふに八万円にて購ひ得たる土地に石油の脈ありて一年二百万円の配当を之より受くるに至りしと云へば其幸運も固より之れありしなる可しと雖ども抑其秘訣は別に他に在りしなり。即ち、氏が英敏俊邁の青年三十二人を求め得て赤心を披て其事業の成敗に任せしめたるに在り。氏自ら語て曰く、若し人今日我に向ひ四億の富と三十二人の青年俊傑と孰れを棄つるやと問うものあらば予は一刀両断答へて曰ん、四億円を抛棄して直に再び三十二人の青年俊

傑を率ゐる新事業を經營するの道途に進軍す可しと。然ども氏の出色なるは其の巨富を得たる点よりも寧ろ其富を使用するの点に就いて深遠なる考究を試みしに在り。曰はく富を単に蓄積するのみにては人間の品位に高尚なる能はずして却て墮落し、其幸福も増加せざるものなり。父祖より譲り受けたる富は其人をして墮落せしむるの力一層強し。故に自ら額に汗して得たる富は之を散じて使用するにも是非共生前自己の権能を以て使用し終らざる可らず。遺産として子孫に積むるが如きは人の権能を失ひし死後の事なれば其此の如きは富を棄つるに等し。裸体にて出産したるものは裸体にて世に出でしめざる可らず。曰く富者は単に資産の番頭たるに過ぎざれば如何にして能く番頭の義務を尽くす可きやは。富者に取ては最も重要な問題なりとす。漫に施与を爲すは資産を海に投ずるよりも悪しく十中九分九厘迄は好結果を見ることなく唯自ら助くるものを助くる時に於てのみ其効あり。去れば富者に最も苦しき地位に立つものにして一方資産を普通の方法に由りて慈善に投ずるは世に悪結果を遺すの恐れあり。さりとして他方に之を死守せんが富者として死するは死して恥辱あり。此に於てか生前如何なる処に資を散せんかを論じて左の如き方法を撰びたり。

- 一 大学を創設し又は拡張する事
- 二 公開図書館を設置する事
- 三 病院医学校実験室を設置する事
- 四 公園を築造する事
- 五 公会堂倶楽部音楽館を設置する事
- 六 公共游泳場を設置する事
- 七 教会堂を建設する事

斯くて既に齡六十を超へて尚ほ金儲の事に齷齪たるは褒む可き事に非ざると昨年六十二歳にして翻然事業界を去り、其所有の製鉄会社株を二億円にて売却し、今や閑地に悠適して如何に其億の富を兼ての主義に従て使用せんかと思考中なり。氏が今日迄に公益慈善の事業に投じたる資金は既に二百七十五万円に上ると云ふ。氏幼にして貧困の家

に生れ教育を受ずと雖ども常に自ら勉強して学問筆硯を研ぎ、社会、政治、哲学問題等に就て識見あり。著書亦少なからず。就中、英国旅行記、民政の凱歌、米国内治論、富の福音、富の利用等尤も広く行はれ其他雑誌に寄稿したる論文亦頗る多しと。氏の行為の形跡に至ては人々必ずしも模す可らずと雖ども其精神に至ては慥かに事業家の龜鑑たるものなくんばあらざるなり。学問、品格、事業は富を作るの方便か。抑富は此等を得るの方便か。見よ、英杜事件と其名を連想せらるゝ英人セシル、ローズ氏を彼は少壮笈を負ふてオックス、フォールド大学に学び、不幸肺患に罹りて半途にして退学、夫れより療養の爲め南阿に赴き、其拔群の手腕を揮てキンバレー並びに其附近の五十有余の金剛石採掘会社を合同せしめて一大会社を創設し、僅々十余年間に三億円の資産を作り、南阿植民地に於ける無冠の帝王とも謂つ可き偉大なる勢力を有するに至りたり。然るに一旦身体健康に復するや飄然一個の書生となりて再びオックスフォールド大学に入り研鑽他念なく学識を以て同大学の明星と称歎せられたり。滔々たる我邦人の思惟するが如く、学問果して富、勢力、權威を得るの方便なるか。セシル、ローズは何の故に既に此等を得て居り乍ら反て再び学生の生涯に還りたるか。滔々たる世人が富を作るに齷齪として文学、美術、宗教等、高尚なる趣味を解するの素養を為すの違なき程に其身を忙殺したるは是れ自ら好で彼の糊口に追れて少しも余裕なき貧人の惨況に陥るものに非ずや。此の如くにして争で能く人生を楽しむを得んや。既に高尚なる樂趣を解せざるが故に適ま娛樂を取らんとすれば卑猥肉肉的の娛樂を取り遂に其身を墮落し延て亦ま毒を社会に流さざるを得ず。労働は固より好みす可き事なりと雖ども知識を養ひ、趣味を養ひ、品性を養ふ時間迄も之が為に奪ひ去るは是れ自由なる人間の生涯に非ずして奴隸の生涯なり。牛馬の生涯なり。文明社会の紳士は返すくも此辺の注意こそ肝要なれ。

## 註

- (1) Cornelius Vanderbilt (一七九四～一八七七) はアメリカの鉄道王といわれた鉄道実業家、富豪。
- (2) Rothschild 家はもとヨーロッパの財閥。アメリカでもその末裔が少なからずいた。
- (3) Jason Gould (一八三六～一八九二) はアメリカの鉄道事業家。
- (4) Andrew Carnegie (一八三五～一九一九) は、アメリカの実業家で「鋼鉄王」と呼ばれた。
- (5) スコットランドのこと。
- (6) 「裸体にて……可らず」は、旧約聖書「ヨブ記」一章二一節をふまえている。
- (7) Cecil John Rhodes (一八五三～一九〇二) はイギリス生まれの政治家、富豪。南アフリカのキンバリーにおけるダイヤモンドの採掘で大成功を収め、その経済力によつて政治家となり、遂には首相にまでなり、自らの名を冠してその地をローデシアと命名するに至つた。

## 解

「致富」を果たしたとされるイギリスおよびアメリカの、代表的ないわゆる成功者を紹介している。かれらはいずれも若き日にはあるいは篤い信仰をもつて清貧に甘んじて労働に勤しみ、結果として巨万の富を築いたことを素朴に称賛している。この背景には、組合教会、会衆派の祖国・アメリカへの単純素朴な憧憬があるように思われる。ロスタイルドやカーネギーらの成功者が成功ののち、いわゆる種々の社会貢献を行っていることも紹介し、最後に、労働にこそ励むべきではあるが、「知識を養ひ、趣味を養ひ、品性を養ふ時間迄も之が為に奪ひ去るは是れ自由なる人間の生涯に非ずして奴隸の生涯なり。牛馬の生涯なり。」ということを強調している。柏木がかれら成功者を称賛する所以は、たんに労働に励んだことのみならず、右のように「知

識を養ひ、趣味を養ひ、品性を養」うたことにあった。そしてこの「品性」こそ柏木が重んじた倫理性であった。しかし、右の論説では、その倫理性が信仰に由るといふことは特に明らかに説かれてはいない。その意味で、この第一九号の巻頭論文は取り上げられる固有名詞こそ多岐に富んだ人生訓ではあつても、信仰をすすめる論文もしくは説教としては成功したものとはいえないだろう。

○第二十号（明治三十三年六月十八日）

発行人兼印刷人 大久保真次郎

真善美の礼拝

もろ／＼の天は神の栄光を顕はし、穹蒼は其手の業を示す、此日こ  
とばを彼の日に伝へ、此夜知識を彼の夜に送る、語らず言はず其声  
きこえざるに、其響きは全地に偏く其ことは知のはてに迄及ぶ、  
神はかしこに帷幄を日の為に設け玉へり、日は新郎が祝ひの殿を出  
得るが如く、勇士が競ひ走るを喜ぶに似たり、其出で立つや天の涯  
よりし、其連りゆくや天のはてに至る、物として其和照を蒙らざる  
はなし、神の法は完くして靈魂を活きかへらしめ、神の証詞は堅く  
して愚なるものを智からしむ、神の訓教は直くして心を喜ばしめ、  
神の誠命は清くして眼を明かならしむ、神を惶み畏るゝ、道は清く  
して世々に絶ゆることなく、神の審判は真実にして悉く正し、之を  
黄金に較るも多くの精純金に較るも弥増りて慕ふ可く、之を蜜に比  
ぶるも蜂の巢の滴瀝に比るも弥増りて甘し、爾の僕は之に由て傲戒  
を受く、此等を守らば大なる報賞あらん、誰か己の過失を知り得ん  
や、希くば我を隠れたる科より解放ち玉へ、願くば爾の僕を引止め  
て故意なる罪を犯さしめず、其を我主たらしめ玉ふ勿れ、去れば我  
れ謹なきものとなりて大なる科を免るゝを得ん、神、我誓、我贖主  
よ、我口の言我心の思念爾の前に悦ばるゝことを得しめ玉へ（詩篇

第十九）

英国十九世紀の文豪カーラエルは古代の人が天体を拝むのを今人が一

概に迷信として嘲り去るを浅薄だと云つて申すに、天上に燦然として  
星が輝て居るのは恰も深遠なる無限の処より此下界を見下して居る小  
さき眼の様である、其処から深き／＼内部の栄光を顕はして居るでは  
ないか。其処に神的美が輝きて居る。此莊美を見て畏敬讚美の念に  
堪へず。アーアーと讚美する、是が古代の人々の天体崇拜である。無  
限の歎美敬仰はれが真正の礼拝である。古代の天体崇拜は此感念より  
起て居る。然るに學術の名を以て僅かに天地の皮相を研究したばかり  
既に天地の理を知る可しと為し、此歎美の念を失つて仕舞ふのは馬や  
駱駝の如き莊美の感なき鈍物であると痛罵致しました。「もろ／＼の  
天は光の栄光を顕はし穹蒼は其手のわざを示す」宏壯美麗なる大建築  
は其建築家の手のわざを示すとすれば此天地は神の御手の業を示して  
は居りますまいか。コンコルドの哲人と称せらるゝ、エーソン<sup>1)</sup>は空気の  
清澄透明なる美術品の蓋となり居るグラスの如く無限なる天の莊美を  
透し診るを得せしむる意匠と見ゆるア、莊美なるかな星輝燦爛たる清  
夜の天よ、若し一千年に只一度此美景出現したりとせよ、吾人は如何  
に之を歎美す可きか。幾世幾代の後迄も当夜出現したる此美妙なる神  
の都城の記憶を伝へて忘れぬであらうと申しました。然るに「此の日  
言を彼の日に伝へ、此夜知識を彼の夜に送る」で幾千年の昔より幾千  
年の後迄も「其響は全地に偏く其言は知の涯に迄及ぶ」で智愚を問は  
ず貴賤貧富を論ぜず、神の御手に由て書かれたる此莊美なる天地の大  
画軸に由て神の大なる無声の言を聴くことを得るは実に幸福と謂はね  
ばならん。「日は新郎が祝ひの殿を出るが如く勇士が競ひ走るを喜ぶ  
に似たり。其出で立つや天の涯よりし其連り行くや天のはてに至る物  
として其和照を蒙らざるはなし」美いではないか、万物の色々を照り  
出す日光は天地は実に神の栄光の照り輝く上席の宮殿である。天地の  
美妙は取りも直さず無限の神の美が顕現したるものである。ウオグ  
オース<sup>2)</sup>の詩やラファエルの画や古来天来の絶品と称せらるゝ大傑作は  
実に天才が恍惚として天地美妙の神に入り美の本体たる神の嘘気に触  
れて其心無限の歎美敬仰に満たされたる其刹那に成りしものであるま

いか。天来の美術作品は実にカーエルの所謂真正なる礼拝の産物である。天来とも称せらるゝ詩歌音楽絵画は実に其詩人音楽師画家の礼拝である。さればこそ昔し或る卓越なる音楽師は其神に祈り、或は感謝せんとする時は常に唯独り静寂なる会堂に往て徐ろに音楽を奏で、心中独逸ドレスデン市の美術館にラファエル画きたるマリアが聖嬰基督を抱き居る絵があるさうであるが、拝観人の其室に入るや一種の感に打たれ談話頓に途切れ笑声さへも静まり一室は恰も会堂の如く神聖だと申します。美術家のインスピレーションとは即ち無限の美に接して無限の歎美敬仰を現はしたる状態に外なりません。無限の歎美は即ち真成の礼拝である。詩人は之を詩に現はし、音楽師は之を音楽に現はし、画家は之を絵画に現はしますのであります。美術の絶頂は真正の礼拝である、即ち美術の極致は宗教であります。

天地は美の天地であるばかりでなく亦真理の天地であります。真正の学者の眼には天地は皆真理と見へる一草一石も真理である。去れば彼の進化論者の泰斗たるダーウキンには學術研究に熱心で他事を顧みる暇がなかつた為めか、雄大莊美なるミルトン<sup>3</sup>の傑作も人情の極致を穿たるシェーキスピア<sup>4</sup>妙曲も何の妙味なく稀世の音楽も彼には何の快樂も無つたさうだ。併し蚯蚓の作用の研究には三十余年を費したさうである。真正の学者には他に尊貴なるものはない。唯天地の心裡のみである。名譽もなければ勿論利欲は尚更ない。ダーウキン自らで数年来深く考へ博く研究して尚ほ大成を期して未だ其進化説を発表せざるや。ウオレーズ<sup>5</sup>と呼ぶ少壯の博物学者、其研究の結果を記してダーウキンに送り、之を世に公にせんことを求めて参りました。思ひきや、此論文は彼が多年研究せる持論と暗合するものであつた。若しも名譽に駆らるゝ俗学者ならば己が多年研究せる一大新説を一切他人に其発表を先ぜられんかとあせり悶き、又嫉みなどすることでありませうがダーウキンの脳中は皓々たる明月の如く反てウオレーズの功を傷けんことを恐れて己が新説の発表を暫く見合せんとさへ致しました。併し其学友の勧告に由りて遂に兩人の説を同時に発表致しましたが其

名声端なく学者間に高くなりしを聞て驚て「予は名譽を得んが為めに一步たりとも横路に入りし覚なきを信ず」と人に語つたさうであります。学者は其全心全霊を真理の祭壇に献げて居るものである。彼のアルキミデース<sup>6</sup>が一心不乱数理の研究に余念なく城門破れて敵軍其室内に闖し来る迄全く知らざりしと云ふが如き二ウトン<sup>7</sup>が学理の想念に耽りて鶏卵を蒸んと欲して過て懷中時計を鍋中に投じて煮たりと云ふが如き、是れは天地の真理に触れて恍惚として居る有様であります。陳腐の語ではありませんが、彼の二ウトンが真理は茫々際涯なき大洋の如くである。我儕は只海岸に立て一ツの小さき貝殻を以て海水をすくふ童児の如しと申しましたのは即ち、是れ二ウトンが無限の真理に向て現はしたる無限の歎美敬仰であります。學術の絶頂は矢張真正の礼拝である。即ち學術の極致は亦宗教であります。

天地は亦善の天地である。天地の本体は純善である。ケレども多くの人々は申しませう。世界の何れの国家でも陸海軍の経費は莫大のものであるは是れは全体何の為である。裁判所警察署監獄は何の為に在るか。善の世界には是等のものは不用ではないか。罪悪がなければつまり宗教などでは要らぬ筈だ。社会改良だの矯風だのと云ふは罪があるからではないか。見玉へ。世界には何処でも悪が仲々気焔を揚て居るのである。天地の本体は善だなど云ふのは宗教家の空想である。理想家の嚙語であると。然り、此世界には糞もある、蛆も居る、掃溜もある。仲々美の世界など、は見られぬは美感なき豚の如きものには当然であらう。併し美の天才の眼には天地は美と見へるのである。俗人の眼には蚯蚓や蝦蟆に何の心裡があるかである。ケレども真理を求むる学者の眼には天地は皆真理である。一として學術の問題に上らぬものはない。此火宅穢土とさへ称せらるゝ世界も善を根柢とせる神の国と見ゆるは当然ではあるまいか。其中に真理がなくば何で貴重な三十余年の歲月を凡々たる蚯蚓の研究に費しませう。人心の底奥に善の潜み居るを認めずんば古より聖賢君子が何で人類の教化に其心血を濺ぎませう。基督が人類の為に十字架上に其身を牲献し玉へしは罪人の

裡にも聖なる神の肖像あるを認め、其の靈光を琢き出さんと期し玉ふためではありませんか。教育や宗教の存在は善の存在を認定して居るのである。皮相を觀、一時を察すれば成程悪の氣焰の揚るが如く思はるゝと雖ども深く考へ遠く察すれば人心の奥にも歴史の流れにも其根柢には善があります。否な偉大なる勢力を以て社会と人心とを支配して居ることを認むることが出来ず。支那人は民の口を防ぐは川を障ぐよりは甚しと申しましたが、羅馬のニーローの如き暴君は其赫々たる威焰を以て随分民の口を嚙くませず。然れども決して内なる我真心の声を沈黙させることが出来なかつた。斯る際には善の勢力、実に当る可らずである。聖賢徳行の勢力の深くして永きを見れば愈々分明であります。エミールの著者として教育界に頭はれ仏蘭西革命の鼓吹者として政治社会に知られ、宗教には寧ろ敵したるジャンジャック、ルーソーは若しソクラテースが聖人の如く死せしとせば基督は神の如く死せしと謂はねばならんと稱賛致しました。実に基督の死は神聖なる死でありました。佐倉宗吾は義人と稱へられて居りますが、彼は「三年を出でずして此怨み屹度思ひ知らせん」と絶叫して最期を遂げました。然るにソクラテースは己れを死刑に処せしものが秋豪も己れを害する能はずして反て彼等自身を害し居るを憐れみ諄々として其弟子を教へ且つ慰め乍ら從容毒を服して逝きたるは実に聖人らしき高尚なる死でありました。基督に至ては十字架上に在て「天父よ、彼等を赦し玉へ。彼等は其為す所を知らざればなり」と己れの苦痛を忘れて反て現に己れを十字架の刑に処したる敵人の為に祈り玉へしは実に是れ世界の人類を子とし玉ふ神の愛の発現ではありませんか。「道、肉体となりて人間の中に宿る」「神の榮への光輝其質の真像」等の形容を以て顯はされたる基督は実に活ける神の顯現と申して差支はありませんまい。無限の善なる神は此に顯現して居ます。人が虚心坦懐立に対して思を運せば自分無限の歎美敬仰之に加へて愛慕の情が起ります。ユリテリアンの哲人チャンニング氏は道德進歩すれば宗教となると申しましたが、別に深き意義もなく徒らに処世の術と見る三田流の道德

は固より俗である。彼の美術家が丹青を灑らして其理想を大理石面に刻み出さんとするが如く己れの品性を彫琢して理想的人品を我品格に実現せしめんとするが如き、未だ道德の醇なるものではない。道德の絶頂は即ち無限の善に対する無限の歎美仰敬愛慕である。取りも直さず無限の善に対する真正の礼拝である。

不流功利不流禪 大丈夫心期聖賢 尽得終生堅苦思 欲披雲霧看青天

(功利に流れず禪に流れず 大丈夫の心は聖賢を期す 終生堅苦しき思ひを尽くし得て 雲霧を披き青天を看んと欲す)

とある横井小楠先生の詩は善く道德修養の極意を表はしては居りませまいか。道德修養の督目的は雲霧を披て無限の青天を見るのである。即ち真正の礼拝に達するのである。道德の極致は亦宗教であります。人の靈性は真正の礼拝を渴望致します。此に達しませんうちは人間の高貴なる稟性は決して満足致しません。真正の宗教は無限なる真善、美の礼拝、即ち天地の神の礼拝であります。

#### 註

- (1) コンコルドは、アメリカ、マサチューセッツ州コンコード、エーソンは、エマーソンの誤か。エマーソン Emerson (一八〇三〜一八八二) は詩人、思想家。
- (2) Sir William Wordsworth (一七七〇〜一八五〇) は、イギリスのロマン派詩人。
- (3) John Milton (一六〇八〜一六七四) は、イギリスの著名な詩人。代表作は『失樂園』
- (4) Alfred Russell Wallace (一八二三〜一九一三) は、イギリスの博物学者で、自然選択説を案出した。
- (5) Sir Isaac Newton (一六四二〜一七二七) はイングラントの物理学者、数学者、神学者。ニュートン力学で知られる。
- (6) いわゆる皇帝ネロの事。Nero Claudius Caesar Augustus

Germanicus (三十七、六八)

(7) 佐倉宗吾こと佐倉惣五郎(？、一六五三)は、下総国佐倉藩内で「義民」として活躍し、後に神格化された人物。領主堀田氏による重税から領内の農民を救うために將軍に直訴を行い、のち刑死した。

(8) 新約聖書「ヨハネによる福音書」一章一四節および「ヘブライ人への手紙」一章三節。

(9) William Ellery Channing (一七八〇、一八四二)はユニテリアンをはじめた会衆派牧師。柏木はチャンニングを高く評価していたわけではなかったことがわかる。

(10) 福澤諭吉をさす。この言い方から柏木が福澤の功利主義思想を「俗」として否定的な評価をしていたことがわかる。

(11) 横井小楠『小楠堂詩草』所収の詩。野口宗親編『横井小楠漢詩全文釈』（熊本出版文化会館、二〇一一）によれば、「功利」は徂徠学、「禪」は陽明学をさす、という。たしかに朱子学者小楠にしてみれば、徂徠学でも陽明学でもなく、「雲霧を披き青天を看んことを欲す」ということは全く不自然ではないだろう。小楠の意図がそのようなものであるとして柏木の、陽明学の肯定的評価とはやや矛盾めいて見える。本文にいう「小楠先生の詩は善く道德修養の極意を表はして」いるという言い方からすると、朱子学者としての小楠を高く評価しているように見える。ただ、そのあとの道德修養の目的が「真正の礼拝」である、「道德の極致は亦宗教であります」というものからいってはなお、陽明学に肯定的である、と言ってよいだろう。その意味で、柏木が引用した限りの小楠詩の（「功利」は別としても）、「禪」は陽明学とせず、禪そのもの、と解するのが適当と思われる。第七号註12では、柏木には陽明学にかなりの傾斜がみられる由を指摘した。なお（一）内は、この詩を私に読み下したものである。

## 解

この論説は、「です・ます」体で書かれ、また難解な用語などを用いていないことなどから、おそらく「詩篇」第一九編をテキストとした礼拝説教の草稿と思われる。古代人の天体信仰から説きはじめ、芸術、自然科学、教育、そして道德などの究極は「宗教」であると論じ、幕末熊本朱子学者、横井小楠の詩を紹介することで道德修養の重要性を語り、結論として「真正の宗教は無限なる真、善、美の礼拝、即ち天地の神の礼拝」であると述べた。このなかで、小楠詩自体の「功利」の意味したところは、おそらく『横井小楠漢詩全文釈』のいうように徂徠学、ということであろうが、それを引用した柏木の意図としてはおそらく福澤諭吉を代表とする功利思想にが念頭にあったのではないか。そしてその人格が、大理石上に丹精に表現された彫刻の如きまでにはるかに至っていないことを以て評価していないことは注目すべき柏木の見解がみられる。

矜恤ある者は福なり

柏木義円

七) 矜恤ある者は福なり、其人は矜恤を得べければなり（馬太伝五の七）

われ（神）矜恤を欲みて祭祀を欲まず（同九の十三）

去る五月二十九日の毎日新聞の三面記事に貧、自殺と云ふ見出しにて最も悲惨なる記事が載せてありました。其れはこうであります。

世に貧しく哀れなる者少なきにはあらねど斯ばかりなるは又稀なる可し。芝琴平町一番地寄留、古物商沼田秀三郎（三十七）は数年前仔細ありて故郷大坂を立退き、今の所帯を持ちて僅かの金を資本として古物商の鑑札を受け、日々御膳籠を荷ふて屑屋で御座い屑やお払い、と市中を呼び歩き、妻も亦人仕事などして兎も角も老母おさい（六十七）と七ツの長女を頭に三人の子供を養ひ居りしが近年物価の益々昂れるに伴れて然なきだに貧しき活計向

の弥が上にも不如意となり、殊に一昨年女房の風邪に心地と打臥したるが原因にて貧苦の中に残りし後は第一手足纏ひの乳呑の世話其他内外の何や彼や皆我手一ツにて世話を焼かねばならず、夫が為め自然商売も思ふに任せず、慙くて昨年一ぱいカツタ々乍ら送りしかど、此一月以来の不景気に我乍らゲツソリ身の瘡見ゆる迄となり三人の小供は右左より、お父さんお腹が減つた、ひもじいよと取継らるゝ度に身も世もあられず思はず袖を嚙締て男泣に泣く事も縷々なりしが、私の様な者でも慙じ親があればこそ三人の小供にも却て憂目を見するなれ、親さへなくば情けある人の手に救はれて餓も凍もせで成長するは必定、老先短き只た一人の母親には誠に気の毒なれど今や早や外に分別もなし、さうじゃく〜と決心なしけん。一昨夜何処にてか僅かの金を才覚して老母にも小供にも常になく種々のもを饗応い、表面は最と機嫌よく打寛ろきて更くる迄語らひ外乍ら心の中を別を告げ頓て三時頃に至り時刻は宜しと起直りて是が別れか見納めかと小供の寝姿をヂツと眺めて声を呑み、暫し涙に暮れたる後、信と心を励まして店の框に腰打懸け用意の薄刃取出して咽喉笛グサと刺貫きアツと叫んで倒れし音に於さいは吃驚眼を覚して何事なるかと探り寄れば杖とも柱とも頼む秀三郎が刃に伏して倒れ居るにぞ、這は何事ぞと半狂乱、蹠踏く足を引き摺りて喘ぎ〜此趣、芝署へ急訴に及びしかば詰合の菊地警部は荒牧医師を伴ひて出張し夫々検証に及ばる間もなく手負は急所の痛手に朝も待たで空しくなりぬ。此有様に老母おさいは心地よげに他愛なく寝入れる小供を揺り起して一度に死骸へ縋り付き前後も知らず泣き崩れしかば立会の係官も其心中の切なきを察して覚へず貫泣せしと云ふ、然もあらん小供に空腹を訴へて縋がられても如何とも為し難き親の身の心の苦しき如何ばかりにて在りしならん。今宵限りと覚悟して母と小供に御馳走して暫しの慰めを与へし其心の中は如何にてありしならん。此の如き境遇に在るものには一片の同情と僅かなる其折々の情との贈与とは

如何に大なる救済でありませうか。此風波荒らき浮世の波間より真実此の如き境遇に在るものを発見して之に適當なる助力を与ること叶ひなば如何ばかりの喜びでありませう。仏蘭西の文豪ユーゴーのラ、ミゾレブルの開卷劈頭のエム、ミリエルと云ふ天主教監督の佳話があります、此人は至て清廉で慈悲深く其の祈禱室の祭壇として用ひ居る机が余りに粗末の物でありますから、篤信なる富家の婦人達が屢々新しき麗しき祭壇を作り玉へとて寄附する処が何時も其金を貧乏人にやつてしまつて仲々祭壇は作りませう、そうして申しますには「最も麗しき祭壇は慰められて神に感謝する不幸なる人の靈魂である」と基督の末日審判の喩譬は如何でありますか。

人の子己の榮光を以て諸の聖使を率ゐる時は其榮光の位に坐し万国の民の其前に集め羊を牧ふ者の綿羊と山羊とを別つが如く彼等と別ち、綿羊を其右に山羊を其左に置く可し。斯て王其の右に居る者に云ん、我父に恵る、者よ、来りて創世より以来爾曹の為に備へられたる国を嗣け、そは爾曹我飢し時、我に食せ、渴きし時、我に飲せ、旅せし時、我を宿らせ、裸なりし時、我に衣せ、病し時、我をみまひ、獄に在し時、我に就ればなり。是に於て義者彼に答て云ん、主よ何時爾が飢たるを見て食せ、又渴たるに飲し、や、何時主の旅したるを見て宿らせ又裸なるに衣せしや、何時主の病み又獄に在を見て爾に至りしや。王答て彼等に曰ん、我誠に爾曹に告げん、既に爾曹我此兄弟の最微者の一人に行へるは即ち我に行ひしなり。遂に又左に居る者に曰ん、罰せらる可き者よ、我を離れて悪魔と其使者の為に備へたる熄ざる火に入れよ、そは爾曹我飢し時我に食せず、渴きし時我に飲せず、旅せし時我を宿らせず、裸なりし時我に衣せず、病み又獄に在し時我を顧はざればなり。是に於て彼等亦答て曰ん、主よ何時爾の飢え又渴き又旅し又裸又病み又獄に在るを見て主に事へざりしや、其時王答て彼等に曰ん、我誠に爾曹に告げん、此最微者の一人に行はざるは即ち我に行はざりしなり。此等の者は窮りなき刑罰に入り、義



者は窮りなき生命に入る可し（馬太伝廿五章）

神に斥けらるゝ者は如何なる者でありますか。畜に訴る者、淫を行ふ者、人を苦める者などばかりではありません。進んで善を為さざる者であります。愛の行を為さざる者であります。又神に嘉賞られます者は如何なる者でありますか。単に消極的に悪を為さゞのみの者ではありません。進んで積極的に慈愛の行を為す者であります。基督教の倫理は積極的であります。人は悪を行ふの恐る可きを以て善を為さゞの恐る可きを知らず、悪魔に事るの非を覚れど神に事へざるの非を覚らず戦々恐々と唯消極的の道徳を修めて大胆に進んで神の爲め、社会の爲めに活動して積極的の道徳を修めません。所謂道徳家の精神萎靡して振はず「お人善し」と云はるゝに止るは之れが為であります。蘇国グ  
ラスゴー府の良牧師スタウカル氏は

前の日施したりし銅銭の悉く銀貨に非りしを悔むの日、將に來らんとす。嘗て貧民救助の醜金をば五月蠅き迄に我に請求せし人は反て我恩人なりしと思ふ日將に來らんとす。又富める者の食卓にて費せる百時間よりも貧しき人の家にすぐせし一時間を心に留め置くことの大切な時、將に來らんとす

と申されました。去れば孤兒院等慈善事業の爲に身を献げ真に救済を要する不幸なる者を発見して我輩の金品をこの貴き用途に向けることを得せしむる方々は取りも直さず我輩の恩人と謂はねばなりませんとの名を以て不幸なる者を慰め、之をして神に感謝するを禁ずる能はざりしむるは神に献ぐる最も美しき祭壇に存じます。我矜恤を欲みて祭祀を欲まず。是れ我輩の神の聖旨でございます。

## 註

(1) ユーゴの長編小説 *Les Misérables*。日本では黒岩涙香による翻案が柏木も購読していた「万朝報」に連載されたが、それは一九〇二（明治三五）年からその翌年にかけてのことであつた。しかしこの論説は「月報」の明治三三年六月号に掲載されたもので

あるから、柏木の知識となつた「ラ、ミゾレブル」は何に由来するかは不明。

(2) 『レ・ミゼラブル』の重要な登場人物で、翻訳ではミリエル司教と表記される。柏木がここで「エム、ミリエル」と言っているのはおそらく敬称としての *Monseigneur* に由来するか。

(3) James Stalker (一八四八―一九二七) はイギリスの牧師、神学者。『キリスト伝』などを著した。

## 解

この論説もおそらく「マタイによる福音書」五章七節、九章一三節をテキストとした礼拝説教の草稿とみられる。貧困な家族の一家心中事件の新聞記事の紹介から説きはじめ、キリスト者が教会における豪華な「祭祀」ではなく、「善」「愛の行」としての、そして貧困な人々への積極的倫理のあらわれとしての「矜恤」にこそ努めるべきことを力説している。冒頭に紹介されている毎日新聞五月二九日の記事に柏木は大いに触発されて執筆されたものであろう